

情報共有

非管理メモ

取扱注意
公開不可

手許資料
東京電力株式会社

4枚

プラント状況(本店レク) 議事メモ

8/24 15:10

14/DA 555反

〜 官有連絡帳

日時：平成23年8月24日(水) 11:00~11:30

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約20名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ ダスト濃度測定地点位置図
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ(8月24日6時現在)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 4号機の配管のにじみの原因について、何かわかったことはあるか。

A. 今のところわかっていない。以前にも3箇所で漏えいする事象があったが、原因については、交換したホースの調査を進めているところ。

Q. 今回にじみのあったホースの材質は、これまで漏えいしたものと同じか。

A. 同じ材質、同じ口径ものである。

Q. 漏えいの要因として、力の加わり方などが考えられるのか。

A. 今回取り替えたホースではないが、調査しているホースにおいて、特段ねじ曲がった箇所で漏れている状況ではない。もともとフレキシブルホースは配管表面が皺のよくなもので加工しており、それが何らかの影響を与えているのではないかと、今のところ考えている。

Q. 流している水の成分が影響して、ホースが劣化したのでは。

A. 流れている水は使用済燃料プールの水。以前に海水を注水しているため塩素は入っているが、直ちに腐食が進むものではない。詳細な原因については、調査を進めているところ。

Q. 今後、同様な材質のホースについて取り替える場合、どの様なホースにするのか。

A. 今回で漏えいしたホースは4本目になるが、今後も続くようであればホースの全面的な見直しも必要と考えている。

Q. 雑固体減容処理建屋の水位が本日上昇傾向に転じているがその要因は

A. 雑固体減容処理建屋の水位は、昨日 16 時から 235mm 上昇している。3 号機 T/B の溜まり水は、ポンプ 2 台でプロセス主建屋および雑固体減容処理建屋へ移送できるような配管になっており、途中にバルブで移送先を切り替えられるようにしている。今回、両方へ移送したところ、プロセス主建屋へ送る分が雑固体減容処理建屋へポンプ 2 台分流れていた。そのため、プロセス主建屋の下がり方が大きく、雑固体減容処理建屋の下がり方が大きかった。現在は雑固体減容処理建屋への移送を一旦停止して、全てをプロセス主建屋へ移送している状況。

Q. 現在の水位は 3,432mm であるが、予想以上に水位が上がってしまったということか。

A. 雑固体減容処理建屋は 4,200mm まで受入可能なため、リスクが高まっている状況ではないが、半日で 235mm 上昇していることから、上昇量を抑えている。

Q. ダストサンプリング地点の追加について、A・B 地点は一日 1 回測定を行うのか。

A. A・B 地点は本日、C 地点は明後日になるが、船または地上にダストサンプラーを置いて、一日に 1 回測定をする。

Q. 海上のダストサンプリングは A・B はそれぞれ 1 ヶ月、C 地点は 2 週間とのことだが、期間を設けた理由は。

A. 今のところは、期間を区切って海上でどのぐらいダストがあるのかを調べたいと考えている。海水のモニタリングは継続的に行っており、常時人がいない海上において、継続的に行う必要はないものと考えている。状況が把握できれば一旦やめる予定であるが、必要があれば、頻度を落とす等で測定を継続することも可能である。

Q. 沖合のサンプリングは 2 週間で 6 回程度になり、風の状況によりバラツキが生じると思われるのが、サンプリングの回数は十分なのか。

A. 十分かどうかについては、実際に測定してみないとわからない。まずは測定してみても地上とどの程度違うのか、また、風向風速等もあわせて計測するので、影響の度合いもわかってくると思われる。現時点での計画であるため、今後検討する余地はあるものと考えている。

Q. 本日から A・B 地点の測定をはじめるとのことだが、既に開始しているのか。

A. 実績については、夕方の会見時にお知らせする。

Q. 3 号機開口部のダストサンプリングは、9 時から開始したということによいか。

A. 本日、9 時頃からダストサンプリングを開始している。

Q. 2008年に福島第一原子力発電所に10m以上の津波が来ることが試算されていたという報道があるようだが、事実か。事実であるとすれば、その試算結果をどこへ報告したのか、DGの位置を変える等の対策を行ったのか、また何をきっかけに試算を行ったのか教えていただきたい。

A. そのような報道があったことについては承知している。現在、政府の事故調査委員会において調査を進めており、当社としては、調査を受けている側なので回答は差し控えさせていただきたい。

一般的な話しとして、いろいろな先生方が地震・津波の想定の方法などを研究され、最新の知見を反映した調査・研究を進められることは事実であり、その方法が認められると土木学会の指針となる。

Q. 事故調査委員会で調査を行っているので答えられないとのことだが、事実関係については話せるのではないか。

A. 現在、3月11日以前の津波や地震対策などについて、社内の調査委員会でも調べている段階であり、調査結果が取り纏まったらしかるべき時期にお知らせしたいと考えている。

Q. 過去の試算内容は学会で発表されている場合もあり、事故調査委員会と関係なく話せるのではないか。

A. このような内容については、固別というよりも全体的にまとまってから、お話しさせていただきたいと思っている。

Q. 政府の事故調査を隠れ蓑にして、全てを話さないということはやめていただきたい。

A. 事実関係と責任問題については分けてお話しさせていただく。

Q. 海上ダストサンプリング結果はどのように活かされるのか。水盤の分析結果にも影響するのか。

A. 地表面でのサンプリングは舞い上がりもダストとして計測する可能性があるので、水盤を用いて降ってきている分を計測する。今回の海上でサンプリングは、海上のため舞い上がりが計測される可能性は小さいと考えている。今回の計測結果は、地上側と海上側でどの程度ダストに差が出るのか、原子炉建屋からの放出量の評価に繋げていきたいと考えている。

Q. 地上よりも海上の方が小さい場合、その差分が舞い上がりと考えられるか。

A. 西門のダスト分析を進めているが、これは風向きによって値が変わらないという状況のため、海上のA・B・C地点との差分を舞い上がりで評価することは可能ではないか。ただし、A・B・C地点でどのような結果が出るかわからないため、まずは結果をよく見てまいりたい。

Q. 建屋の雨水対策の検討状況についてはどうか。

A. タービン建屋側の穴を塞ぐことや、ルーフドレンの漏洩箇所等を土嚢で塞ぐことをすでに行っている。3・4号の原子炉建屋については現在決め手が無いのが実態。瓦礫の撤去等を開始するが並行してカバーの設置もしくは別の方法で原子炉建屋に流入する水をどのように防ぐか検討していく。

Q. 時期的な目処は。

A. 今のところ具体的な方策の見通しは立っていない。現時点では水処理システムを順調に起動させてタービン建屋の水位を下げていきたい。

Q. 雨水対策の完了する時期的な目処として秋頃、年内などとは言えないか。

A. 1号機原子炉建屋カバーのような大がかりなものについて示すことは難しい。3・4号機の瓦礫撤去後、オペフロにある階段を部分的に覆う様なことは可能かと思うが、現段階で具体的に詰め切れておらず、具体的な時期をお示しすることは難しい。

Q. 海上ダストサンプリングを行うA・B・C地点の原子力発電所からの距離は。

A. C地点は沖合から2～3kmの場所で行う。A・B地点の1号機からの距離は確認させていただく。

Q. C地点の採取頻度のみ週3回という理由は。

A. 船を出す都合かと思われるが、詳細は確認させていただきたい。

以上